

中世フランスの美と遺産

阿子島 香

[東北歴史博物館館長講座概要：歴史博物館グローバル紀行

Part2: モノが語る人類誌]④

2025年7月26日

講座要旨

今年度の館長講座は、「歴史博物館グローバル紀行 part 2: モノが語る人類誌」と題しまして、世界各国の博物館を、皆さんとご一緒に巡る旅をしています。考古学と歴史の分野を中心に、海外のミュージアムを訪ねて、世界史の流れを東北地方と関連させて考えています。全8回の連続講座ですが、各回は独立した内容ですので、お楽しみください。今後の内容は、次のように予定しています。⑤近代アメリカの光と影：西部開拓史、⑥世界民族誌と東北旧石器人の文化適応、⑦世界民族誌と東北縄文社会の復元、⑧東北の基層文化論：縄文とエミシ。これまでに私が調査研究を行なってきた地域の博物館を主にして、人類の歴史すなわち世界史の、さまざまな面に触れていきます。またお話の内容では、時々、旧シリーズ「東北グローバル考古学」の、全24回の内容と関連させつつ、参照しています。旧シリーズは、引き続き東北歴史博物館のHPにて、講座概要を公開しております（多くは「読む館長講座」として、改めてエッセイとして再構成したものになっています）。あわせてご参考にしていただければ幸いに存じます。

世界史の流れというと漠然と感じられるかもしれません。もっと具体的には、通年のテーマとしまして「時代区分」ということの意味を考えています。教科書などでは、当たり前のように「原始」「古代」「中世」「近世」「近代」「現代」となっていますが、いったい何がどう変わったのでしょうか。考古学、社会史、経済史、美術史、人物史、また現在の民族誌などの切り口で、それぞれの時代の特徴を探っていきましょう。みなさんとご一緒に、「学び直しの世界の旅」に出たいと思っています。

今回は、時代区分「中世」を取り上げます。前回に取り上げた「古代」からの転換を探ります。日本では、古代律令制の社会から、中世封建制へ、あるいは荘園制に基づく経済への転換として捉えられることが一般的です。寄進地系荘園が支配的になった院政期を時代の画期とする考えが有力です。世界的には、中世の封建制度が典型的に発達したとされる西ヨーロッパを基準にして、時代区分が設定されてきました。西ヨーロッパと日本列島において、類似する社会経済的構造が見られる点が、特に注目されました。しかし世界史の発展段階とされる過程には、多くの多様性があって、なかなか統一的に理論化するには至っていません。

原始時代、古代の回の講座でも、世界の多様性を考えてきました。それだけ、人類の歴史には、多くの別々の道筋があったということでしょう。なぜ日本とヨーロッパが類似する展開を示したのか、またどのような相違点があるのかは、世界史にとって重要な論題と思います。

6月講座では、古代ローマ帝国時代のポンペイを中心に考えました。ヴェスヴィオ山の大噴火によって壊滅した南イタリアの街の実際を、多くのスライドで見てきました。AD79年の大噴火で消滅したのは、ポンペイばかりではありませんでした。比較の事例として、今日はヘルクラネイム（現エルコラーノ）を取り上げます。館長撮影の多くのスライドで、古代ローマ期の斉一的な文明のようすを探ります。ローマ帝国は、広大な版図を「属州」として統治しました。講座では、ガリア（現在のフランス）に残る水道橋（ポン・デュ・ガール）と、円形闘技場（ニーム）をご紹介します。

「ローマの平和」のもと、地中海を「我らの海」として交易が栄え、繁栄を謳歌した文明も、やがて衰亡を迎える、AD395年にローマ帝国は東西に分裂、そして西ローマ帝国は、AD476年に滅亡しました。ゲルマン民族の移動、フランク王国の建国、メロヴィング朝からカロリング朝へ、シャルルマーニュ（チャールズ大帝）の戴冠（AD800）、そして中世のヨーロッパ社会が成立しました。このあたりに限らず、各時代にわたり世界史の教科は「暗記科目」か？と言われるように、多くの名前や年号が出てきて、辟易（へきえき）する感があります。講座では、項目や名前ではなく、土地と生産など社会経済の構造に着目しましょう。また、庶民の生活の実態や、支配者階層の統治機構に着目しましょう。歴史的な構造に注目すると、日本と西ヨーロッパ、また世界各地との比較が、非常に興味深く思われます。これは、旧石器時代から現代までの世界史の学びを通じての、館長の基本的な考え方です。

今回探訪する史跡、博物館は、古代のヘルクラネウム（ナポリ近郊）、中世のアヴィニヨン教皇庁と博物館、アヴィニヨンのプチ・パレ美術館、パリ中心部のセーヌ川左岸、ソルボンヌにある「国立中世美術館」です。一般に、ヨーロッパ世界の源流として、三つの流れがあると言われます。ヘレニズム（古代ギリシアから、ローマ帝国に至る「古典古代」の文化の流れ）、ヘブライズム（ユダヤ教からキリスト教、そのカトリック教会に至る文化の流れ）、ゲルマニズム（ゲルマン民族や、先住ケルト人、また北方ノルマン人など、土着のヨーロッパ諸民族の風俗や習慣、信仰、社会制度）です。これらがどのように融合して、中世ヨーロッパ世界が展開したか、解説していくことが重要です。

講座では、館長撮影の写真多数を見ながら、「モノが語る人類誌」を考えたいと思います。ローマ・カトリック教会は、1309年から1377年まで、その教皇庁の座を、プロヴァンス地方のアヴィニヨンに移していました。その背景には、ローマ教皇権とフランス世俗王権との非常に複雑な関係の推移がありました。この間を「教皇のバビロン捕囚」と呼んだりしますので、教皇が捕われたかのようなイメージが持たれます。全く違いまして、アヴィニヨンの旧教皇庁を訪ねますと、まさに防備された莊厳な教皇宮殿という印象に変わります。パリの国立中世美術館は、クリュニー美術館とも呼ばれ、中世の修道院運動の一大拠点であったクリュニー修道院（ブルゴーニュ地方、ベネディクト派）のパリ拠点の遺産で、古

代ローマ時代の遺構の上にあります。中世キリスト教美術の展示品の数々は、ヨーロッパ世界の源流を訪ねる旅の必見ポイントといえるでしょう。

トピックス

以上は、全体の要旨です。以下に、スライドで解説した内容から一部を選んで、項目的に紹介します。

・まず講座のお題です。前回の古代ローマ、ポンペイとソンマ・ヴェスヴィアーナ、ナポリ国立考古学博物館を訪ねる旅の続きです。2回でセットですが、ヨーロッパ世界の源流を訪ねる旅です。ヴェスヴィオ山の大噴火（紀元79年）によって埋没した被災遺跡は、ポンペイばかりではありませんでした。ヘルクラネウム（現エルコラーノ）も、火碎流・泥流に呑まれました。近代考古学の発達史のうえでも、重要な遺跡です。地方都市、港町、別荘地でした。ローマ帝国本国のもう一つの港町の、遺跡の現状および史跡整備のようすから考えます。また代表的なインフラ、水道橋の遺跡（ポン・デュ・ガール）を訪ねます。

ローマ帝国は、紀元2世紀トラヤヌス帝の頃に最大版図となりました。その領域は、現在の西ヨーロッパ地域の多くを含みます。現フランスの地域は、「ガリア」と呼ばれ、かつての辺境でしたが、帝国領の中で「属州」として発展しました。ガリア・ローマ（Gallo Roman）と呼ばれます。属州は、ローマ本国と同様な発展があり、数多くの遺跡が残されています。紀元前50年代、共和政末期に、ユリウス・カエサルが繰り返し遠征を行なって、北方のゲルマン諸族の文化や社会を含む詳細な記録が残されました（『ガリア戦記』）。

ローマ帝国の衰亡ののち、ガリア地域は「フランク王国」が支配し、やがて中世の時代を迎えます。中世フランスは、キリスト教世界の中核でもありました。フランスに残る中世の遺跡や文化遺産を訪ねて、それらの持つ「美」にも着目しましょう。またヨーロッパの「中世封建社会」の構造を考えながら、日本の荘園制、武家社会との、東西の比較文化という視点で歴史を考えていく方向を探ります。

エルコラーノの都市廃墟遺跡

・エルコラーノ（ヘルクラネウムの遺跡）とヴェスヴィオ山の位置のスライドです。エルコラーノは、ナポリとポンペイとの中間、当時の海岸沿いにあります。ヴェスヴィオ山周回鉄道で、ナポリから20~30分の距離、ヴェスヴィオ山の南西になります。ユネスコの世界文化遺産「ポンペイ、エルコラーノ、トッレ・アンヌンツィアータの遺跡地域」として、1997年に登録されました。うち3番目は、「オポロンティス遺跡」で、海岸の貴族・富裕層の別荘地という性格が強いです。いずれも、深い火山噴出物が堆積していて、「地底の森」ならぬ「地底の街（まち）」といえます。犠牲者の遺体も、近代考古学の形成期に発掘調査が開始されるまで、1700年もの間、そのまま埋もれていたわけです。なお同時代の史料として「小プリニウスの手紙」がありますが、青柳正規先生の訳で、2022年に宮城県美術館で開催の「ポンペイ展」図録に収録されています。

・エルコラーノの当時の人口は、ポンペイの1～2万人に比べて小さく、約5000人との推定があります（諸説あり）。ポンペイが商業都市という性格が強いのに対して、海岸の保養地的な性格もありました。ポンペイが降り続く火山灰により埋もれた（深さは、約4m）のに比べて、一気に火碎流（泥流）に呑まれました。その堆積は20mに及びます。そして遺跡の保存状況の良好さについては、ポンペイ以上という評価もあります。発掘調査されていない部分の現在の地表面は、深い火山噴出物の上にあって、そこに現在のエルコラーノの市街地があります。発掘された部分は、地表下に深く埋もれていたので、結果的に遺跡を崖とスロープが取り囲むことになります（スライド）。現在の市街地の下にも、広大な遺跡が埋もれているままです。

・ヴェスヴィオ山は標高1281mあり、エルコラーノの遺跡はその南西側の山麓になります。この山の形、現在の山容は、AD79年の大噴火によって山頂部がなくなった姿といいます。かつての山容は、発掘された壁画にも見えます。ヴェスヴィオ山は活火山なので、今も噴煙が出ています。私は機会がありませんでしたが、登山鉄道で火口近くまで行けるとのことです。鉄道会社のPRソングがあって、「フニクリフニクラ、誰と行く、フニクリフニクラ」という歌詞を記憶されている方もおいでかと思います。スライドはビジターセンターです。また崖の上から見ると、この街の廃墟のスケール感が迫ってきます。写り込んでいる人たちの大きさと比べてみてください。

・街の通りは、石畳みで舗装されていました。崩壊した上部は、取り除かれています。発掘前には、構築材などの崩壊物が、一面に堆積していました。発掘調査は、ポンペイより早く、1738年から開始されました。堆積物の深さが違うので、（ポンペイの約4mに対してエルコラーノの約20m）、次第にポンペイの方へ重点が移りました。庶民の家々には食堂があまり無かったので、飲食店で外食が多かったといいます。（スライド）

・富裕層の邸宅には、天水を導く「アトリウム」（水盤）が設けてあります。壁面の重層的な構造の写真で、剥がれ落ちている部分に違いがあるのは、製作技術による順序を示します。このように、ポンペイの状況以上に、きわめて遺跡の保存が良好な姿は、一気に埋没した経過と関係します。海岸沿いの、船の収容場所（ボートハウス）では、約300人の遺体が折り重なって発見され、人々が、避難していた場所かと推定されました。木材が炭化して残存している部分は保存して、その周囲は別素材を使用し修復していくという手法が分かります。

・富裕層の邸宅では、フレスコ画、モザイク画、多くの美術的装飾で、天井、壁面、床面を飾っていました。神話のモチーフ（ギリシア神話、ローマ神話の両方）の表現、周囲の動植物、果物などの「静物」は、邸宅の主の美的感覚、身についた教養の高さを表わすものとされていました。出土した調度品（彫刻、ブロンズ像、小型の家具）、備品、装飾品、などは、ポンペイの出土品と共に、多くが「ナポリ国立考古学博物館」に収蔵されています。発掘が始まってから200年以上の期間がありますので、散逸した出土品も多いと聞きます。近代考古学が、次第に学問として確立してくる年月でした。

ローマ帝国領の属州ガリア（現在のフランス地域）の発展

・前回から見てきた、ローマ帝国の遺跡、遺産は、ローマ本国についての事例でした。ポンペイ、エルコラーノは、「永遠の都ローマ」から、南方の地域にある、本国内での状況をよく示します。

さて、ローマ帝国は、2世紀のトラヤヌス帝の頃に最大版図を誇っていました。多くの地域は、「属州」として、総督の下に統治されました。属州では、各民族の主体的な活動は、長期間継続した「ローマの平和」：パクス・ロマーナのもとで、かなり尊重されていました。大規模なインフラが整備されました。代表的なインフラに、「水道橋」があります。また、「パンとサーカス（見世物）」（皇帝が食料保障と娯楽提供）という統治手法のもとで、各属州地域では、「ローマ化」が進行しました。ローマ様式の土器型式、いろいろな道具、測量術、社会組織の体系的なコントロールなど、「ローマ化」は、さまざまな面で普遍的になっていきました。辺境においては、ローマ軍の駐屯地に常駐する軍隊があり、さらに辺境へは長城（城壁）が築かれるまでになりました。代表的な長城には、イングランド中部を横断する「ハドリアヌスの長城」があつて有名です。多くのローマ時代のインフラは、ローマ帝国が衰亡し、東西に分裂し（AD 395）、西ローマ帝国が滅亡（AD 476）したのちでも、各地に存続していました。ヨーロッパの都市の多くは、ローマ時代に起源を持つ町でした。「旧市街」とか「歴史地区」とか呼ばれる地域には、かなりのローマ帝国時代の遺構が残っていて、その後に増築されたりしているのも、珍しくありません。ガリア・ローマ（Gallo Roman）の遺跡から、二つ訪ねてみます。フランス南部、プロヴァンス地方にある、ポン・デュ・ガールの水道橋、ニームの市中にある、円形闘技場をスライドで見てみます（館長撮影）。

・アヴィニヨンは、フランス新幹線 TGV も停車する、南フランス、プロヴァンス地方の古都です。写真はポン・デュ・ガールの遠景です。人物（阿子島）が大きく写っているのは、川原から古代建築が立っている、その両岸の堤防上にテラスがあつて、そのテラス駐車場の縁に立っているからです。この遺産の巨大さがよく見て取れます。私の海外の旅は、大体は一人旅で、公共交通機関を使い、現地の言葉で旅するという、若い時からの流儀です。日程に余裕がないとできませんから、ある種の贅沢かもしれません。Pont du Gard（ガール川、また「ガルドン川の橋」）は三階建て構造の水道橋で、橋の長さは 275m あります。アーチ形の石造技術が発達し、アーチ最上部に要石（カナメ石）key stone が嵌め込まれています。この建築は、水面から 49m の高さを誇ります。これは、16階建てのビルにあたります。都市ニームへ、水を引いた遺構です。ニームから水源までの、およそ 50km を通しました。水道の勾配は、1kmあたりで 34cm 下がるという高度な土木工事で、古代ローマが達成した技術水準に改めて驚きます。三階の一番下は、見学者が歩けるように整備されています。ネグリッパの部下、ネマウススが、約 5 年間で建設した記録があるとのことです。

・次にニームの円形闘技場を訪ねましょう。ニームは、アヴィニヨンに近いもう一つの古都です。Arenes de Nimes は、AD100 年頃に建設されました。フランスで最も保存が良い、古代ローマの円形闘技場といわれます。長さ 133m、幅 101m あります。アリーナのサイ

ズは、68m × 38m あって、およそ2万4千人を収容しました。地下にも構造があつて良好な保存状況です（写真）。観客席は、身分によって指定されたゾーンになりました。剣闘士たちのショーが目に浮かぶようです。写真は修復の状況です。遺構を公開しつつ危険を評価し、あまり現代的には見えない材料と手法で、帝政ローマ時代の雰囲気を見学者が追体験できるように意を用いています。現在も順次、修復工事は継続しています。そこそこに、修理中の掲示があるのは、ポンペイやエルコラーノと同様です。

ローマ帝国が衰亡した後でも、属州各地には帝政ローマ時代の遺構が、そのまま残存していることに、驚きを感じました。チュニジア（北アフリカ）などでは、中世の時代にも、使用が続き（水道橋）、近代、現代でも、修理しながらも現役で機能している水道があるというの驚きです。

古代から中世へ

・時代の流れは、古代から中世へと移ります。私たちの旅も、中世へとフォーカスを移しましょう。プロヴァンス地方でも古城（シャトー）は、非常に多数存在し、断続的に使用され、当時の修復を経ていました。地形的な要害の地に、多く存在します。ちょうど中世日本の、無数の館跡の立地を連想します。中世は、戦乱が続いた5世紀～15・16世紀の間です。南フランスの山地には「鷺の巣村」（ワシノスマラ）と称される集落があります。天険の要害の地に、孤立してムラがあるものです（写真）。観光地になっている鷺の巣村もあります。

・ヨーロッパ中世農村の基本的な構造を確認しましょう。10世紀～13世紀ころは、「中世温暖期」といわれた気候で。農業は、大きな発展を見ました。「三圃制農業」（冬作地、夏作地、休閑地）が基本でした。次第に散村から集村に変化し、村落共同体が重要となりました。

「重量有輪犁（ゆうりんすき）」という鉄製農具が生産を安定させました。細長い農地の単位で、冬は小麦・ライ麦、夏は大麦・マメなどが主作物です。領主と農民（土地に縛られた「農奴」）が基本的身分で、領主はまた「騎士」でもありました。騎士道精神と武士道精神との欧日比較など、しばしば論じられます。封建制度の主従関係に基づいた組織で、諸侯が分立していました。国王権力は近世よりも、はるかに弱かった時代です。カトリック教会組織が重要で、権威と精神的な中核でした。美術史上も、教会建築、教会美術が重要です。「正統と異端」については厳しいものでした。フランス社会史、アナール学派のル・ロワ・ラデュリ著『モンタイユー』は南西フランス、ピレネー山脈地方での異端審問記録を史料としています。中世ヨーロッパでは、書物というものは「写本」で、羊皮紙の高価なものでした。スライドは、有名な「ベリー公のいとも豪華な時祷書」の、牛に引かせた重量有輪犁で耕作する農夫の図です。背景には領主のシャトーが見えます。こちらのスライドは1925年刊行の、グラスによる『欧米農業史』から典型的なムラの図です。領主邸宅、教会、牧師家、旅宿、水車場、池、分設農場、などが見えます。農業経済史の研究も百年以上の歴史を有します。ヨーロッパ世界の歴史学の長い伝統と蓄積に圧倒されますが、日本の国史も同様な蓄積がありますから、比較地域史学が比較的近年の動向ということが不思議に感じられます。

(人類学者の個人的感想です。人類学は比較の学問です)。

アヴィニヨン教皇庁宮殿

・写真は、旧教皇庁の上階から望む、古都アヴィニヨンのようすです。南フランスの、プロヴァンス地方の青空の陽光の下、多くの尖塔が立ち、中世都市の面影を留める旧市街には、狭い路地、現在も受け継がれる石造の古い建築（商店街）が並びます。中世都市は、各地に10世紀以降に多く出現しました。広場、教会、密集した市街地、取り囲む都市城壁（囲壁）がありました。農村と都市とは区別され、格言に「都市の空気は自由にする」がありました。一定の期間以上、都市内にいれば、農奴の身分から解放される、の意味でした。また都市は、密集した空間で、衛生状態は良くなく、排泄物の臭気が漂う、などの描写があります。14世紀には、パンデミックであった「ペスト大流行」によって、ヨーロッパの人口が激減しました。諸侯であった騎士の城郭と、都市とはべつモノ、ある意味、両者は対照的な存在といえます。領主と都市が一体化していた日本近世の「城下町」とは本質的な相違がありました。国王権力は弱く、神聖ローマ帝国の王（皇帝）は、各地を巡歴しながら、移動して統治していました。

・こちらは、アヴィニヨンのローヌ川にかかるサン・ベネゼ橋です。「アヴィニヨンの橋」として有名です。橋のアーチ4連分の、途中までが残存しています。12世紀に架橋され、13世紀には戦乱に遭いました。フランスの古い民謡（15世紀ごろからの民謡）に「アヴィニヨンの橋で、踊るよ、踊るよ、・・・輪になってくんで・・・」と歌われる場所です。日本でも愛唱されています。歌詞には *Sur le Pont d'Avignon, … (橋の上で)* とありますが、ご覧のように、橋の上では狭くて、輪になって踊れないようです。これには *Sous le Pont*（橋の下で）、ではないかとの説があります。フランス語の発音では、微妙な違いです。その右に見えるのは、旧教皇庁の宮殿跡（1309～1377、ローマ教皇の「バビロン捕囚」）です。水面に映る、サン・ベネゼ橋と、教皇庁の姿が美しいシーンです（撮影：阿子島）。

・アヴィニヨン教皇庁の外観です。荘厳で大規模な宮殿の威容と、手前の人物との大きさの対比を見てください。頑丈な外壁を有する、要塞のような建築です。広い中庭があります。一部に、古代ローマ時代の遺構を利用して建築されています。旧教皇庁の内部は、博物館となっています。アヴィニヨンでは、1309～1377年までに、6代にわたり教皇が君臨しました。いずれもフランス人です。その直前には、アナニ事件（1303）がありました。フランス軍が、イタリア・アナニにいたローマ教皇を急襲。教皇はその後、病死（「憤死」と表現する歴史書もあります）しました。その後は、教会大分裂（シスマ、1378～1417）の時代となり、アヴィニヨンとローマに二人の教皇が同時並立していました。

・かつての教皇庁内部の、想像復元のCGによるデジタル展示です。荘厳な宗教的中心としての施設でした。アヴィニヨン捕囚という名称から想像されるような、「捕われの教皇」というものではありません。数千人に及ぶ教皇庁の機構全体が、当時は田舎の地であった、アヴィニヨンに移動したのでした。フランスにおいて、国王権力が強くなってくる時代に、

旧来の「超越的権威」としての、ローマ教皇権とは、何度も対立していました。宗教的権威と世俗的王権との対立です。世界史の教科書にあった、1077年、神聖ローマ帝国（ドイツ、北イタリア他）の、皇帝ハイインリッヒ4世が、ローマ教皇グレゴリウス7世に「破門」を解くことを請うた「カノッサの屈辱」の挿絵を思い出します。

・アヴィニヨン市内のプチ・パレ美術館を紹介します。中世後期（イタリアのルネサンス以前で、ヨーロッパの初期ルネサンスともされる）の美術の優品を収蔵展示しています。「最後の晩餐」の絵画で、レオナルド・ダ・ヴィンチ以前です。また、こちらマリア像の青色は、ラピスラズリ（アフガニスタン産の非常に高価な顔料）が使用されています。（スライド多数で中世後期美術の紹介。ほとんどがガラス無しの展示。優品を眼前で鑑賞できしたこと、セキュリティを心配するほど）。

クリュニー美術館（国立中世美術館）

・パリ中心部にある国立中世美術館（クリュニー美術館）は、セーヌ川の南側（左岸）のカルチェ・ラタン地区にあります。ソルボンヌ大学（パリ第一大学）の近くです。（公共交通機関は、地下鉄メトロ Cluny La Sorbonne 駅）。中世から受け継がれている建物に、23の展示室があり、中世美術の粹といるべき優品の数々を収蔵、展示しています。この敷地は、1世紀～3世紀の古代ローマ時代の、属州都市パリの浴場跡になります。ローマ帝国時代の遺構を、中世の修道院は取り入れて、その上に建造しました。14世紀にブルゴーニュ地方のクリュニー修道院が、そのパリ拠点として、修道院長の別宅として建築しました。その後15世紀に大改修されました。ゴシック様式後期の「フランボワイヤン様式」Flamboyant style+ルネサンス様式の複合で。外側の装飾が派手に飾り壁となっています（スライド）。

・クリュニー美術館は、キリスト教美術だけに限らず、中世のさまざまな美術の優品を収蔵しています。重要な美術品に、タピスリー（仏）、タピストリー（英）があります。城郭（シャトー）や邸宅の石造建築の内部を飾る大型の織物です。「つづれ織り」（綴れ織、ゴブラン織り）ともいいます。Tapestry (English), Tapisserie (Francais) です。

・聖堂内部です。ゴシック様式の教会堂は、尖塔、広い窓、ステンドグラス、支柱と梁による強度の保持と、高きへ、さらに高きへ、という精神の表れでした。外側にも、空中の支柱があつて支えになります（フライング・バットレス）。各地でそれらの建設には、非常な長期間を要し建築されました。パリでは、多数の建築物模型展示が、エッフェル塔の隣の「建築文化財博物館」で見られます。多くの歴史的建築の解説がありますが、中世についても、いかに教会建築に、社会のエネルギーが集中されたか、という歴史が実感されます。

・クリュニー美術館の建物は、壁面や、外側の窓の周辺を、多くの装飾で派手に埋める様式です。建築文化財を訪ねる際のポイントは、どのように、決まった様式（style）の限定の中にありながら、そこに美の表現が埋め込まれているか、を読み取るところにあります。そして、その背景にあるのが、建築工学の技術的な時代的進歩といえます。また、ヨーロッパ文明の「石造の文化」と、日本文明の「木造の文化」を対比してみましょう。耐久年月も異なる

ることが、都市や街並みの景観についての考え方の違いをもたらしています。現代でも日本での「老朽化」という概念など。街並みを考えていく基本概念からして、異なっている面があります。

・クリュニー修道院は、東部ブルゴーニュ地方(フランス第二の都市リヨンの北方約80km)にあるクリュニーの町に立地します。スイスのジュネーブからは西北西に約120kmになります。Abbaye de Clunyは、AD910年創立です。ヨーロッパ11世紀の修道院運動の、中心のひとつでした。ベネディクト派の修道院でした。聖ベネディクティスが、イタリアのモンテ・カッシーノに修道院を創立したことに始まる運動です。11世紀には、フランス全土に、1500院もの傘下の修道院を有していました。ローマ教皇に直属し、すなわち世俗権力からは、距離を置く存在でした。「祈り、そして働く」のモットーはよく知られています。

・中世において、社会の知識人の多くは、聖職者でした。ラテン語を解する人々です。古典古代の知識が、イスラーム文明を経由して、再興されました。多くの写本を製作し、農業の革新の担い手でした。現代の私たちが持つかもしれない、人里離れた所の求道者たちというイメージとは、かなり違います。

・13世紀になると、クリュニー修道院組織は巨大化して、次第に活動は衰退したとされます。さまざまな典礼、莊厳な教会装飾、儀礼の体系が複雑化・高度化したとされます。修道院は、領主でもありました。そして「祈り、そして働く」に回帰したのは、シトー派修道会とされます。

・パリのローマ時代は、シテ島(ノートルダム寺院がある、セーヌ河の中瀬の島)から始まり、セーヌ川左岸(南岸)地区へ広がっていました。カルチェ・ラタン地区(この地域の名称は、ラテン語地区の意味)へ南北大通りが伸びて、その両側に、さまざまな都市施設(公共広場 forum、神殿、公衆浴場、円形闘技場など)が配置されていました。このような都市施設は、典型的な「ローマ化した属州」の姿です。公衆浴場の一つの遺構の上に、14世紀～15世紀に、クリュニー修道院院長のパリ拠点が築かれました。石積みも、古代ローマ期の遺構を利用しているのは驚きです。ローマ時代の石造物の展示もあります。

ガロ・ローマン時代と、その後のフランスの継続性

・一般には、中世を「暗黒時代」と捉えて、その前と後、古典古代とルネサンス以降の近代ヨーロッパを断絶させる考え方方が強いようです。しかし現実には、ヨーロッパ世界の景観の中で、ヨーロッパ全体にわたって、古代ローマから、近代都市への連続性がみられると思います。多くの地域の中心都市は、古代ローマ期に形ができて、やがて地方の中心となり、それらとは別に、次第に中世の多くの都市が各地に広く出現し発達しました。

・古代ローマに起源を持つ都市であったパリでも、このように博物館の展示施設として、15世紀以来の修道院建築を活用しています。そこにはローマ時代、中世、現代が、同居しても、全然、違和感はありません。(個人的感想です)。これを現代日本について応用して、考えてみると、たとえば多賀城跡の整備などでも、考えられる活用方式かもしれないと思

います。古代：遺跡、復元遺構、多賀城碑。中世～近世：歌枕、松尾芭蕉など。現代：ライトアップとイベント会場、博物館での生涯学習。異なる時代の現代的同居です。先述の「石造の文化」では普通ですが、「木造の文化」でも可能ではないでしょうか。

・クリュニー美術館の展示を多くのスライドで紹介しました（館長撮影の写真多数）。ヨーロッパの博物館、美術館は、おおむね写真撮影は自由にできます。ただしストロボは厳禁です。中世の教会建築には、奇怪な「怪獣たち」の彫刻は、非常に数多くあります。こちらの写真は、展示室のうち「ステンドグラスの部屋」で、文化財のステンドグラスを取り外し、暗い展示室で照明効果を上げています。

・タペストリーは、中世の城館や教会で、壁面を装飾していた大きな絨毯（じゅうたん）の一種です。ヨーロッパの冬は、非常に寒い季節です。クリュニー美術館の重要なコレクションとして、タピスリー（tapisserie）の収蔵品があります。一角獣を描いたタピスリー「貴婦人と一角獣」は、その白眉とされます。ユニコーン（Unicorn）、これは伝説上の生物ですが、古代ギリシアからの伝説は、中世も生きていました。ユニコーンは性質が狂暴ですが、人間が殺すことができます。鋭い一本の角（ツノ）を持っています。その胴体はウマのように描かれることが多いようです。大きさは、さまざまで、処女の懷に抱かれると、おとなしくなる性質があります。そこで、貞潔の象徴として表現されることもあります。イッカクという哺乳類のツノが伝説的に伝わる事例です。イッカククジラとも呼ばれます。中国では、キリン（麒麟）伝説の一部として、一角獣が表現されることもあります。画像は、RMN（フランス国立美術館連合）他のHPからです。暗い特別展示室（このスライドは借用）にある6枚の連作です。当時の毛織物の産地、15世紀末のフランドルで織られました。連作は、「五感の寓意」（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）と「我が唯一の望みに」という文言がついています。これは、「愛か？」という説もあります。これらの依頼主は、シャルル7世の宮廷有力者、ジャン・ル・ヴィストで、娘の結婚祝いに製作させたとされます（紋章などの分析）。

・中世においては、書物というものは宝物的価値を有していました。先にご紹介した「ベリ一公のいとも豪華な時祷書」は好例でしょう。また修道院では、古典の筆写も盛んにおこなわれていました。祈りを捧げるための、莊厳の道具立てとして、豪華な写本は重要視されていました。羊皮紙に描きました。ヒツジと特定し難い場合、「動物皮製」と企画展示などで表記されているものです。ラテン語が原則でした。また、写本をページごとに切り離して、各ページを独立に美術品として考える伝統も西洋近代にありました。日本での、絵巻とか、和歌集とか、連作を切り離して扱う近世からの書画骨董の世界と似ていて、興味深いことです。

・古典古代世界から、中世への時代的な転換に伴って、「芸術のレベルの低下」が言われてきました。先に説明しました「暗黒時代」という考え方と共通する思考かもしれません。しかし、実際の遺産を見ていくと、決してそうとは言えないのではないでしょうか。むしろ、表現する対象と、表現する様式（人物が平板、平面的に描かれるなど）が、時代により異なる

ったと考えるべきではないでしょうか。アヴィニヨンやクリュニーの優品を見ると、中世は美的水準が低かった時代などとは、とても言えませんね。いずれにしましても、「財力が集中するところに、優れた芸術のエネルギーも集中する」という原理は、古代（帝国富裕層）でも、中世（教会芸術）でも、近世（絶対主義王政の宮廷）でも、近代（ブルジョアや国家の収蔵品）でも、時代区分の違いを超えて、同じ原理であるというのは、考えられられます。そして現代世界の私たちが、公立博物館・美術館などで、それぞれの時代の芸術作品に自由に触れられるのは、幸運なことのように思われます。皆さん、文化財を大事にしましょう。失礼しました。

今回も、ご清聴いただき、ありがとうございました（最後までお読みいただき、ありがとうございました）。

（本稿は、館長講座での配布資料に大きく補足したものです。）